

としょかんだより 第91号

2015年 5月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

2015年 6月開館予定表						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

	9:00-18:30 (5月)		9:00-17:00
	9:00-20:00 (6月)		休館日
	13:00-18:30 (5月)		9:00-19:00
	13:00-20:00 (6月)		

和歌山地域コンソーシアム図書館企画展 高野山をめぐる歴史と文化

図書館閲覧室において高野山開創 1200 年を記念した展示企画を行っています。

滅多に見ることのない図書館で所蔵している貴重書や寄託書を期間限定で展示しています。

興味のある方はぜひ図書館へお越し下さい。

(写真は展覧目録と『両界曼荼羅図』)



※和歌山地域コンソーシアムとは和歌山県在住者・在勤者が利用できる、和歌山県内の図書館にある図書の貸出・配送サービスです(送料等は個人負担)。ご利用を希望したい方はカウンターまでお越しください。

高野山を知る

ベスト 10 上部の企画コーナーにおいて高野山に関する書籍を配架しています。

貸出可能な資料です。どうぞ手に取って高野山の魅力を再確認してはいかがでしょうか。



※高野山関係の資料は閲覧室以外に、第一書庫 4 階の 466 番台にもあります。

開館時間の変更について

6 月より図書館の開館時間が通常通りに戻ります。開館時間は下記の通りです。

平日：9：00～20：00

土曜：9：00～17：00

発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山 385

高野山大学

図書館閲覧室

TEL

0736-56-3835

FAX

0736-56-5590

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

－ 説話の森 (2) －

高野山大学教授 図書館長 下西 忠

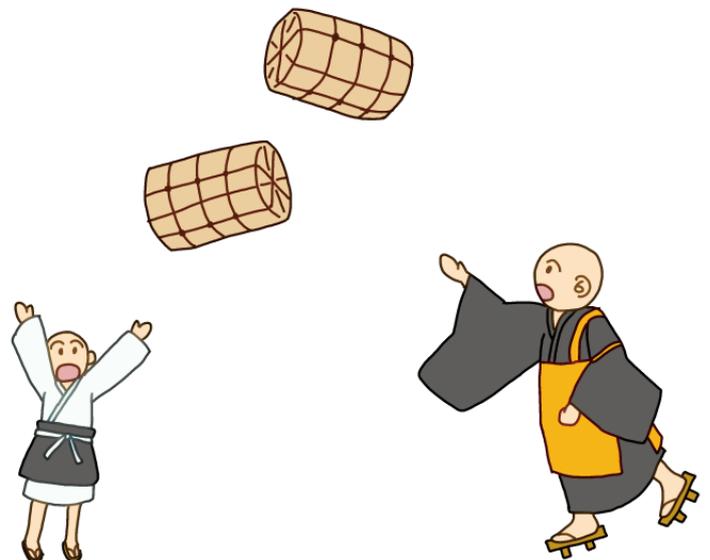
覚猷かくゆうというお坊さんがいる。通称鳥羽僧正という。「ああ、あの有名な高山寺の鳥獣戯画を描いた人だ」と思い出す人もいるだろう。画才のすぐれた僧侶だった。鳥羽上皇の信頼を得て、鳥羽の証金剛院の別当を勤めた関係で鳥羽僧正と呼ばれたらしい。鳥羽僧正はまた、『信貴山縁起』も書いたと言い伝えられている。保延二年（1136）には天台座主にも就任している。しかし三日で辞任している。いや辞任させられたというほうが正しいかもしれない。さて、奇矯な人物僧正に何があったのか……。さて、鳥羽僧正についておもしろい説話がある。鎌倉時代に成立した『古今著聞集』ここんちよもんじゆうという説話集にみえる話である。

供米くまい（神仏に供える米）に関して不正やごまかしがあった時、僧正はそのことを絵に描いた。その絵は、風がはげしく吹いたとき、米俵がたくさん吹き上げられたが、それが塵や灰のように軽々と空に舞い上がるのを、大童子（寺院で召し使う年上の童子）や法師たちがあちこち走り回って取り押さえようとしている、それを僧正はおもしろく筆をとってお書きになったのである。誰がしたのであろうか、その絵を院が興味深くご覧になった。その絵の真意を知るために僧正におたずねになった。「供米にごまかしが多くありまして、本物の米は入っておりません。籾殻ばかりが入って俵が軽いのです。ゆえに強い風が吹くと空に舞い上がるのです。このまま見過ごすことはできません。小法師たちが取り押さえようとします様子がおもしろいので、それを書いたのです」と院に申し上げなされた。院は、不都合なことであるとおっしゃって、それ以後は供米の処置が厳しくなると、不正やごまかしがなかった。

辻風に吹き飛ばされる米俵の絵を描いて、供米の不正を訴えた鳥羽僧正の機知が述べられている。本当は原文で読んでいただくと、もっとこの話の微妙なおもしろさが伝わるが、文字数の都合で残念ながら現代語訳ですました。

僧正の絵に描かれた風刺は俵だけに向けられていない。供米が籾殻ばかりであることを許しているのは果たして誰であるか、米の生産者からいくつもの機関を経て寺院に納められるのであるが、最終的には寺院の米を実際に管理する僧侶が関係しているはずである。僧正の批判のターゲットは寺院の僧侶である。それは本文に「小法師ばらが取り留めんとし候がをかしう候ふを、書いて候ふ」とあることによって明白である。

鳥羽僧正と院、さらに院に奏上した「誰か」の三人の関係はどうなのか、共謀かもしれない。説話は様々なことを連想させてくれる。それが説話を読む面白さである。そこに説話文学の誕生があると言っても過言ではあるまい。



©yoshi